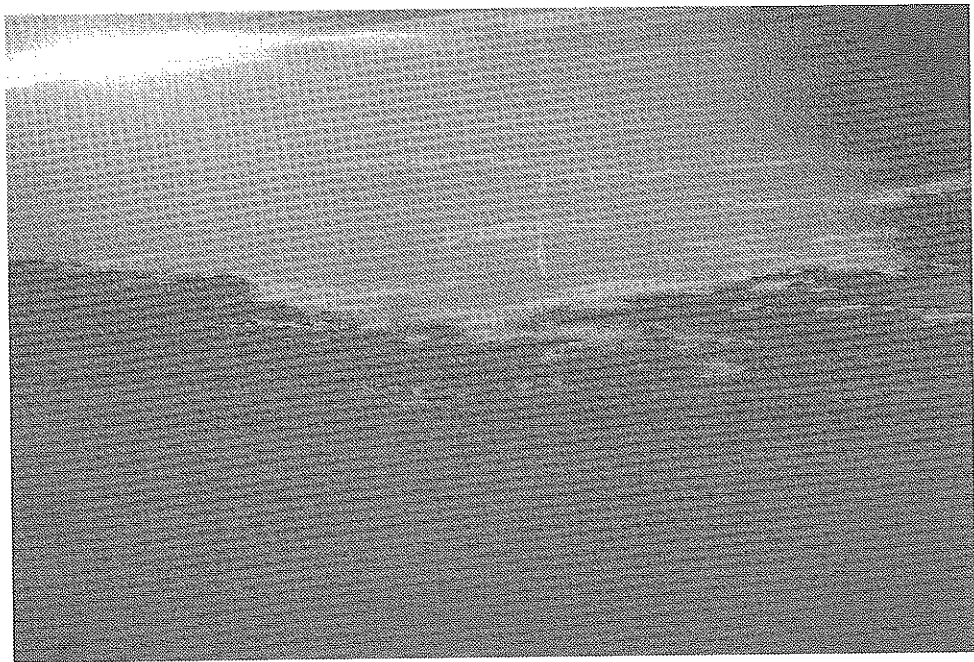


Save The Tropical Forests



森の通信

2009.12.30

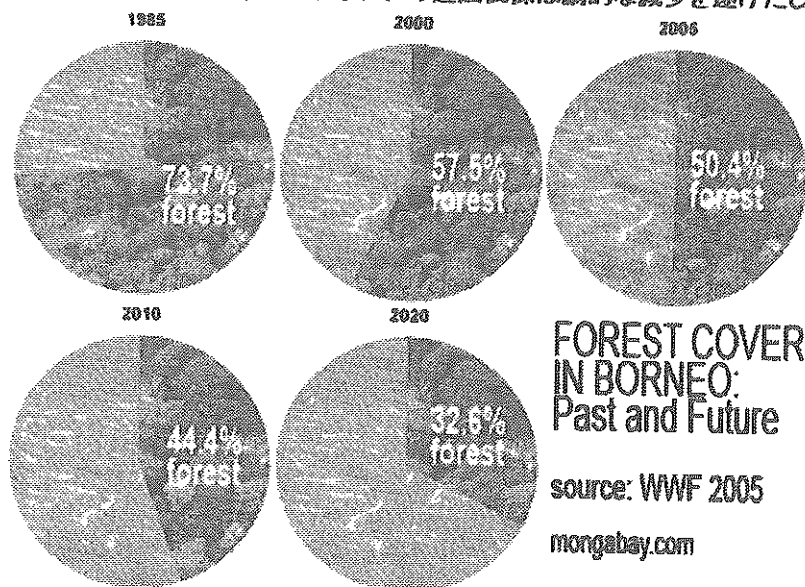


[西カリマンタンの夕暮れ]

CONTENTS

- 3…… people ⑭ ニュマン・スリヤディオトラ  
4…… 11.14 大阪集会報告(1, 2, 3)  
10…… 寄稿・集会に参加して・高阪真帆  
11…… 〃 三宅由香  
12…… 「泥炭湿地・中央カリマンタン火事日記」  
藤原江美子  
15…… 「インドネシアからの違法材を追う」⑫ 西岡良夫  
18…… 世界の森林ニュース  
19…… 新聞記事  
「温暖化?の手ま進んだら……」

## 2010年、市民等の力で、「インドネシアの違法伐採は劇的な減少を遂げた」



上図は 2005 年に 1985 年からの森林破壊を元に WWF Germany が 2020 年までの森林の状況を推測したもの。2009 年に森林被覆率は 42% に減少。ところが 2006 年以降インドネシア政府や NGOs の働きかけで、違法伐採は急激に減りだし、2006 年には 40% に、2008 年には 2 割強が違法伐採と推計されるようになった。今は市民が You-Tube を使って違法伐採情報を国際的にも流している。スハルト政権下で 3 人以上が活動していたら逮捕等があった時代と全く様変わりだ。今は問題があれば NGOs は政府等に直ぐ申入れか、記者会見をする。

それに比べ、サラワク州政府は全く国際情勢を振り返らず、違法材貿易が厳しく絶たれ、丸太等が「密輸できなくても大差ない」、とか「マレーシア独自の森林認証基準に合致した持続的な木材だ」として、今も販売しようとしている。4-5 年間で国際的評価が落ちてはまだ気にしない。違法ラミン材販売も激減し、国際社会は【合法で持続可能な材】と定着しているにも関わらず。

だが今年、サラワク木材協会は「違法材使用は殆んどなし。先住民慣習法を守る」という冊子を国際熱帯木材機関 (ITTO) にて突然配布していた。ケツに火がつきだしたのだろうか。(N)

## 【ウータン活動報告】

2009・9・15 「通信ウータン 93 号」発行

9・26-10・4 インドネシア中カリマンタン調査(西岡等)

10・1 ジャワ島ボゴールでインドネシア NGOs と森林保全への会議

11・10-14 ゲストのトグ、ニョマン、バスキ氏と ITTO (国際熱帯木材機関) 理事会参加(西岡、石崎)

11・12 FoEJapan, GEF, JATAN 等と東京集会開催

11・14 「オランウータンが住める森作りと泥炭湿地林保護を」大阪集会を開催

## People 14 save! the World's Forests

泥炭湿地保護と温暖化保全を目指し、インドネシアの泥炭湿地の状況を世界に報告する  
Wetland インターナショナル・インドネシア事務局長のニョマンさん



11・14大阪集会前日に大阪城へ散歩のニョマン氏 (I Nyoman Ngurah Suryadi Putra)

30名のスタッフを抱えるWetland インターナショナル・インドネシア。事務局長のニョマンさんは在る時は、腰まで浸かりながら泥炭湿地の中で調査する。あるときは今回のようにゲスト講演者になって状況を報告し、泥炭湿地保護と温暖化防止などをPRする。2007年バリでの温暖化防止会議のWetland Dayでは、裏方と同時に進行役もこなした人物だ。Bali会議の前後から私たちもWetlandと知り合い、彼の予定がとれて今回日本へ招聘した。

「何でも食べられるのか」との問いに、「I can eat all」と。バリ生まれだ。色々聞けば、今もバリの海岸で猛毒の蛇もいるらしい。居住しているボゴールの今の家の周りでも毒蛇が出ると。対策をどうしているかと聞けば、「棒で採って瓶に入れて、蛇を貯めている」。ユーモラスな人柄であり、私は来日期間に別名「蛇おじさん」と呼んでいた。

帰国前の最後の地・清水寺で、「この水は旨い! 持って帰る。泥炭地にこんな旨い水はない」と、清水の水を缶に入れる。心は既に泥炭湿地へと向いていた。(文・西岡/写真・石崎)

## 『オランウータンのすめる森づくりと泥炭湿地林保全を ・・・インドネシアからのメッセージ』

「インドネシア、カリマンタンにおける泥炭地 その形成、領域、分布及び埋蔵炭素と諸問題」

Wetland International Indonesia 代表 ニョマン・スリヤディプトラ

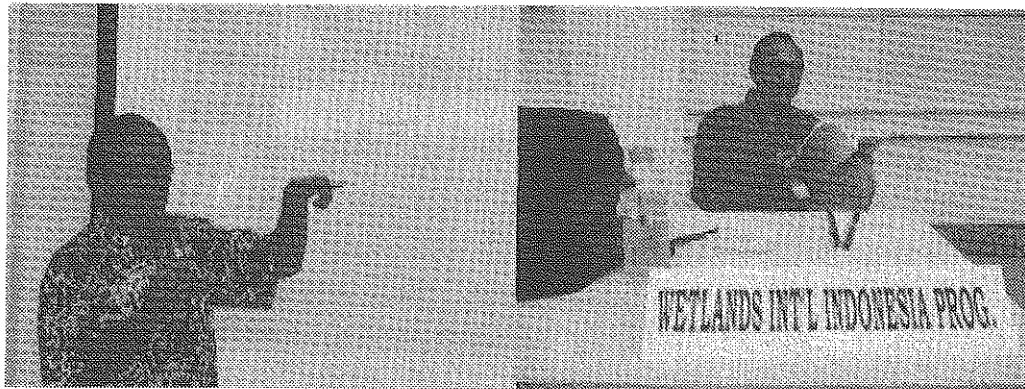
現在、世界には泥炭湿地と呼ばれる土地が約10億ヘクタール（以下ha）存在しています。泥炭湿地には炭素を貯留するという特徴があり、それは500ギガトンという膨大な量であります。そして炭素を貯留していると同時に莫大な量の炭素発生源ともなります。それは現在大きな問題になっている気候変動の原因であり、海面上昇などの脅威につながるものです。

インドネシアには4000万haの湿地があり、そのうち泥炭湿地は2100万ha、マングローブ450万ha、その他となっています。泥炭湿地の内訳としては、スマトラが700万ha、パプアが800万ha、残りがカリマンタン。インドネシアの人口の60%、すなわち約1億人が沿岸地域に住んでいるために、気候変動の結果、内陸へ移ってくる可能性もあるのです。

さて、泥炭湿地とはどのようなもののでしょうか。木や生物の死骸が落ちてドームのようなものを形成しています。それは、森林、有機物からなる泥炭、水である沼の3つの要素から成り立っております。形成されるには数千年の時間を要し、カリマンタンの泥炭湿地は5千～8千年といわれています。水の高さは平面ではなく、ドームの一番上にあたる。深いところでは10cm掘ってもまだ水がある。泥炭湿地全体は一つの生態系であるとも言えるのです。

泥炭湿地は大きいほど、失われた時のCO<sub>2</sub>の排出も多い。湿地はカリマンタンでは中部、西部に多いのですが、中部では570万ha、112億トンのCO<sub>2</sub>が貯留されています。

大統領令32条によれば、3m以上の深さの泥炭湿地は保護されることとなっています。しかし、それ以外は開発してよいので、泥炭湿地を開発して、アブラヤシやアカシアが植えられています。それは土地全体の崩壊につながる大きな問題なのです。

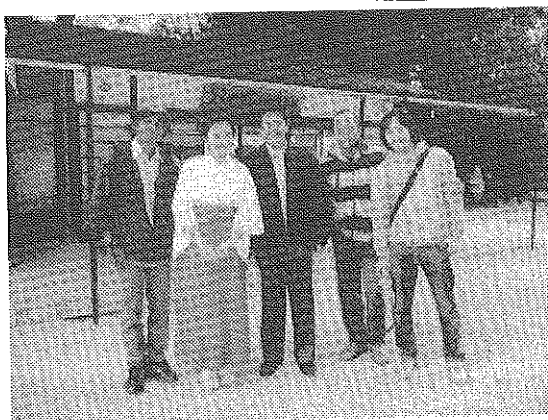


泥炭湿地減少の大きな問題の一つが、違法伐採です。違法伐採者はチェーンソーで木を切って、水路から運ぶ。泥炭湿地の水がその水路から流出される。そうなると、その土地は火がつきやすくなり、火事が多くなる。それがCO<sub>2</sub>の排出につながるのです。地中深く火がついてしまうと消火活動はほとんど効果がなくなります。また、火災の他にも、灌漑によって水面が下がることでCO<sub>2</sub>は排出されます。泥炭湿地を1m掘ると年間1haあたり93トンのCO<sub>2</sub>が排出される。土地は1年間で10%沈下し、木の根が表面に出てきて、木がゆがむのです。

現在CO<sub>2</sub>排出第3位のインドネシアでは、G20において、大統領が26%のCO<sub>2</sub>削減を発表したが、上記の理由により難しい課題だと言わざるを得ないでしょう。

WETLANDSとしてはどのような活動をしているのか。1995年に当時のスハルト大統領がメガライス計画を発表しました。主に中部カリマンタン100万haの泥炭湿地を米を作るための土地に転換する計画です。中央カリマンタンには、合計4500kmの4つの大きな水路が通されたが、それが大きなミスとなりました。当初、水路から水路へ流れるはずの水が川へ流出したのです。その対策としてWETLANDSがとった手段は非常にシンプルなものでありました。水路を封鎖して、村の人にポールを立ててもらったのです。それによって以前、氾濫した場所は2006年にはすでに緑化しました。ここからわかる教訓は、まずは第一に水を止めることが大切だ、ということです。次に木の根でダムを強化するために、木を植えました。4年たつとダムは木でいっぱいになりました。水路を封鎖すると、地域が湿地になる。そうすると苗が自然に成長するので植林する必要がなくなるのです。WETLANDSがこだわったのは、原生の種を使って再生するということです。現生種ですでに500haを再生させました。しかし、遠くない場所では火事が起きているのです。たくさん地域を封鎖しなければ、どこかで火事が起こってしまうのです。

もう一つの問題として無計画に掘られた水路（溝）があります。それに対し、WETLANDSは地域の人々を説得し、溝を埋めて新たな池を作るように仕向けました。当初、聞いてもらえなかったが、説得するための理由を語りました。溝を封鎖し、池の水に魚を貯めることによって収入を得られるよ、と。このことを実践していった結果、この土地の人々の収入の約5割が魚をとることからえられるようになりました。この出来事は、放置された水路に対して、地域住人が管理する方法を作りだすことができるという教訓を教えてくれるのです。

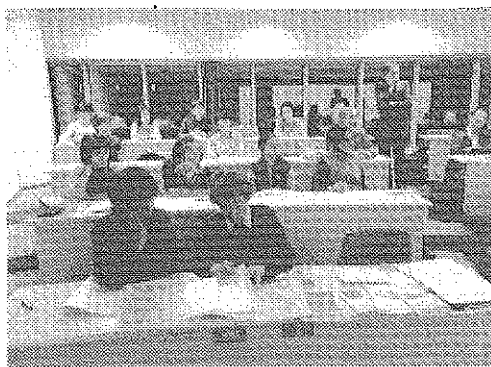
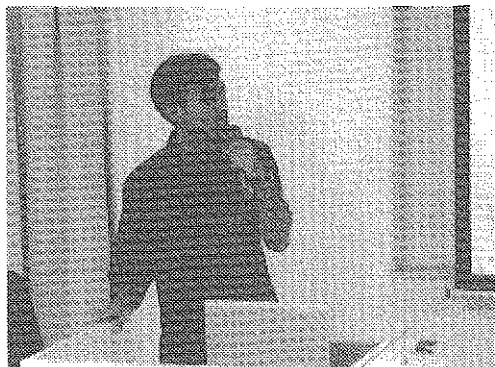


## 『オランウータンのすめる森づくりと泥炭湿地林保全を

・・・インドネシアからのメッセージ』

### 「タンジュンブティン国立公園での私たちの経験と地域における森林の再生活動」

Friends of National Parks Foundation 森林保全担当 バスキ・ブディ・サントス



いつもは森で生活しておりますから、これほど大勢の人の前で話すことは少ないのできどきしております。私は、フレンドオブナショナルパーク（以下FNPF）という組織のメンバーとして、カリマンタン中部のタンジュンブティン国立公園で活動しております。今日は私たちの経験と地域における森林の再生活動についてお話します。このプレゼンテーション全体を通して、規模が小さくても非常に大きな結果が生み出せるんだということをお話したいと思います。

タンジュンブティン国立公園は、ボルネオ島中央カリマンタンに位置し、41万5千ヘクタールの大きさです。泥炭湿地、低木森林などなどによってなりたっており、ギボンやサンバーディアなど非常に多様な動物が生息しています。現在、国立公園には違法伐採、違法狩猟、森林火災、違法な鉱物採取、アブラヤシプランテーションなどたくさんの脅威が存在します。違法伐採は国立公園内では、2001年に終わりました。違法狩猟についてはまだサンバーディアなどが狩猟されています。ハンターは動物を脅し、捕獲しやすくするために火を使うのですが、その火が森林火災の原因となります。森林火災は毎年起っている公園内でも特に大きな問題なのです。かつての国立公園の森林の55%が火災によって無くなってしまいました。2006年には1500ヘクタールが焼け、苗床も失われました。二か月前の火災では、その時の教訓から人々と協力して2006年ほどの被害にはならなかったのです。その他、違法な鉱物採取やプランテーションの拡大は今も続いています。

危険にさらされている種についてお話します。タンジュンブティン国立はオランウータンの最大の生息地です。オランウータンの数は現在3000頭ですが、リハビリセンターの中に1000頭います。森林規制局の計画により、オランウータンのリハビリセンターは2015年までに閉鎖される予定になっています。私はこのことを非常に心配しています。リハビリセンターが閉鎖される一方で、オランウータンを受け入れる森林が少なくなっているとすればオランウータンはどうなるでしょう。

現在非常に餌に依存しているので、餌を与える機会がなくなると、どうなってしまうのか。オランウータンはその準備ができていない。受け入れる森林も準備できていない。ですから出来るだけ早く森林再生に取り組むことが非常に重要なのです。また、ウリン（鉄の木と呼ばれ100年持つと言われる）に関してですが主に違法伐採により数が減っています。私たちはウリンをたくさん植えて再生させようとしています。

保護活動から私たちが学んだ教訓を話します。活動の多くが必ずしも成功したとは言えません。その理由の一つは、地域の人々の支援が得られなかったことです。それから環境の劣化に対する人々の意識は低いという問題もあります。その他、政府機関、NGO同士の利害当事者としての協力がうまくいっていない、プログラム実行がばらばらである、法の実行がうまくいっていないなどがあげられます。FNPは、保護活動において、総合的なアプローチを目指しています。それはつまり、それぞれの活動が相互に関係し合うやりかたであり、単独の問題だけに取り組むのではなく、森林再生、教育、コミュニティー活動、啓発など様々な活動を行います。

### 森林保護のやり方

森林レンジャーはただパトロールを行うだけでなく、苗床、教育、再生などの活動もしています。ただのパトロールでは、人々と話することもなく、人々の共感を得ることはできません。

### 森林再生についての取組み

特に重要なことはプログラムがシンプルであること。なぜなら地域の人々と共に取り組むからです。自然林の再生を加速させること、希少種を取り戻し、広げること。野生種の生息地を再生させることなどを行っています。私たちのやり方、目的、趣旨は単純で現実的、経済的、効果的、そして地域の人々が行えるということです。

### 私たちの現場の調査のやり方

地域の人々がもともと持っている知識をもとにする、歴史をもとにする、土地の個性を基盤にする、などを重視しています。

### 森林再生の手法

回廊を作る。間をあけて植える。木をどこかから持ってくる。自然の陰を作って覆う。一番早く生えてくる種を大事に使う。などの工夫を行っています。

私たちにとってはコミュニティーの人々は非常に重要な存在で、いつも私たちはコミュニティーの人々とともに活動をしています。彼らが、森林はとても大切に、人や動物にとってそこがホームなのだど認識してくれれば、森林は安全になると信じています。とくに若い世代は非常に重要で、地域の人々とともに森林について学んでほしいと思います。

これまで総合的なアプローチを語ってきました。大切なのは現場をもとにしていること。特にコミュニティー、文化、土地の特徴などを考えなければなりません。そして、多くの場所でプログラムを実施することです。私たちがタンジュンブティン国立公園でなにをすべきかですが、まずは森林再生をしなければなりません。できるだけシンプルな方法かつ、地域の知識を元にした方法で森林再生を行うために、地域の人々を支えていくことが必要です。

## 『オランウータンのすめる森づくりと泥炭湿地林保全を

・・・インドネシアからのメッセージ』

### 「インドネシアにおける違法伐採問題と森林管理」

前林業大臣相談役 現 Forest Watch Indonesia 代表 トグ・マヌレン

インドネシアの森林は非常に多くの危険な問題に面しております。まずは森林減少。森林減少の原因の一つは違法伐採です。法律や規制が守られず木が切られています。もう一つは森林火災で、何百万ヘクタールもの森林が無くなっています。次にインドネシアの木材加工業です。さて、ここでみなさまにお話をしているのはなぜでしょう？なぜなら、インドネシアの木材問題は日本の方々にも関わっているからなのです。インドネシアの木材の最大の消費国は日本です。日本の友人には、日本国内での法律規制も重要だということをお話していただきたい。インドネシアの森林を保護する責任の一部をぜひ日本の人々にも共有していただきたいと思います。

現在、インドネシアの報道や政府報告では違法伐採が減少していると報告されています。法的な取り組みがうまくいっており、違法伐採問題に取り組んだ結果、年間30億USドルの節約がなされていると報告されています。違法伐採は減少している。しかし、一方では、森林面積も減少しています。なぜでしょう？現在でも年間約100万ヘクタールもの森林が無くなっています。主に違法伐採は別の土地に転換する目的、特にアブラヤシプランテーションにするために行われます。そのためには許可が必要ですが、その前に伐採活動が行われています。それは違法伐採であり、原因としては、法の執行が弱い、汚職、森林ガバナンスがうまくいっていないことが考えられます。

現在、木材の合法性とその保証システムが注目され始めています。しかし、合法材の定義づけはなかなか困難な問題で、関係者が議論して6年かかるということもあるほどです。原因の一つは社会的な問題で、先住民の人々の権利に関わる問題です。先住民が木を切った場合、政府からすれば政府の土地なのでそこで摩擦がおきるのです。

多くのインドネシアの木材を輸入している国では、認証の問題に取り組んでいます。たとえば、EUでは自主的な協力協定を結んでいて、EU市場に持ち込まれる木材は合法案ものでなければなりません。米国ではいわゆるレイシー法というものが作られています。米国市場に木材製品を輸出しようとする場合、輸出企業は製品がどこからきたか、木材の名前、どこでとれたのかを申告しなければならない。すべての植物にすいて記録、ラベルの偽装、説明表示の偽装を違法とする。申告は木材を輸入した段階でしなければならない。木材の学名、輸入量、輸入価格、どこでとれたかを明記する、というものです。

日本ではグリーン購入法というものがありません。しかし、私はこれを改正し、レイシー法に近くしてほしいのです。なぜならインドネシアの材木の多くはロンダリングを受けており、マレーシアや中国を通っていく場合もあります。きちんと申告し、違法した場合は処罰することが重要です。



違法伐採や材木の適法性は持続可能な森林管理のごく一部にすぎません。森林資源をいかに持続可能な形で管理していくかです。気候変動の問題や温暖化の問題も私たちは懸念しています。森林はCO2を多く貯留していますから、森林減少をできるだけ押さえないといけないのです。

インドネシアの森林政策には、5つの優先政策があり、①違法伐採とそれに関連した取引と戦う②材木産業、とりわけ森林産業の再生③森林資源の保護と再生④森林地域におけるコミュニティの強化⑤森林地域の区分を明確にする。大変な仕事であります。

森林管理の問題を解決するのもうひとつ重要なのは、森林管理ユニット（FMU）を作るということです。特に重要なのはす森林エリアの境界を明確に定めること。すなわち、地域のコミュニティー間や企業同士の土地対立の解決であります。この対立がリスク要因になってビジネスの世界でも障害となります。森林管理ユニットを作る目的は、現場レベルで効果的で持続可能な森林管理ができるということです。具体的には、現場レベルで林業政策を行う、森林資源管理をよりよくし、地元民や森林産業に対するサービスを向上するなどのことがあります。

これまで、木材製品についてお話しましたが、森林から生産されているのは木材製品だけではありません。多くの非木材製品があり、そちらのほうがお金にしたときの価値は大きいわけです。インドネシア政府はそれらを活用していく必要があります。たとえば、ラタンから家具ができます。樹脂から多くの製品を作ることができます。また、薬草があります。薬局から薬を買うと高いですが、多くは熱帯林から作られたものが多いのです。

森林は他にもインドネシアの野生生物、生物多様性を守っています。あるいはCO2を貯留し、温暖化をとめていく機能があります。インドネシアの森林は国家経済の支えであると同時に世界中の人々の生命維持システムという重要な役割を持っているのです。

最後に日本の友人のみなさまにお願いしたいのですが、ぜひみなさまのお力を貸していただきたい。その方法の一つとして、インドネシアの木材製品を消費される時は、それが合法的なルートから来ているのか、持続可能な管理がなされているかを考えてください。

記. 石崎



## 自国の森を守りたい！3人に勇気づけられた私

高阪真帆

ボルネオ島マレーシアの山の中。私は、直径1mもの丸太が次々とトラックで運ばれて行くのを毎晩、眺めていた。聞けば、この丸太はインドネシアからだという。インドネシアの森がものすごい勢いで減少しているのではないかとこの丸太は日本にいくのではないかと気にはなったが、何も行動せずに日々を過ごしていた。

マレーシアから帰国してからもそのモヤモヤは消えなかった。友人に誘われて、今回の講演会に参加した。講演会では、森が燃え、保護区なのに木が1本もないところがあること、インドネシアの違法伐採は減少したとはいえ、1年間に100万haもの森が減少し続けていることを知った。予想以上の深刻さに驚いた。

しかしながら、今回の3人の講演者であるトグ氏、ニョマン氏、バスキ氏にはとても勇気づけられた。彼らはそれぞれの立場で、「自分にできること」を実践している。特に、私とあまり歳が変わらないバスキ氏には心を打たれた。大学を卒業して、そのまま就職すれば、いわゆる「裕福な」生活ができたらうに、彼はそこに価値を見出していない。1人で村に入り、村人を説得し、村人と一緒に森を守る活動を始めている。相当な努力と忍耐を要したことだろう。

よし！私も何か行動しよう。とはいえ、すぐには思いつかない。ただ、木材製品をみると、その木がどこから来たのか気になるようになった。そこで、事業者に聞いてみる。

「これはどこの木ですか？」

「熱帯材だと思います。」

「そうですか。インドネシアとかの森がどんどん減少していることに心が痛みますね。」

「それよりも、早く景気がよくなって欲しいですね。」

あっ！話を変えられた……。熱帯林の保全が叫ばれて久しいが、まだまだ私たち消費者の関心は低いようだ。これはヤバイ。まずは消費者の意識を変えなくては。

講演の翌日、講演者3人と奈良・京都観光に行った。彼らとは新たな絆が生まれたように思う。ジェントルマンなトグ氏、大阪のおっちゃん風なニョマン氏、シャイボーイのバスキ氏。彼らと胸をはって再会できるように、周りの人と一緒に「自分にできること」を探し、実践していきたい。

最後に、3人との出会いの場を提供してくれた「ウータン・森と生活を考える会」の皆様へ感謝する。



## ウータンの講演会を聞いて

三宅 由香

今回の講演を聞いてとても印象に残っていることは、インドネシアから来た方たちの熱意と一生懸命さでした。よくよく考えると、私たちに話をするために、わざわざインドネシアから何時間もかけて日本に来てくださったのかと思うと、身の引き締まる思いがしました。実際、彼らの話す内容はどれも現実味を帯びており、それまで「結局は遠い国のお話…」といい加減だった自分の考えや気持ちが本当に恥ずかしくなりました。ニョマンさんは、インドネシアで直面している泥炭湿地林の危機を、バスキさんは、国立公園内での野生動物保護や地域の人々との植林の経験を、そしてトグさんは、日本が輸入しているインドネシア産木材の実態を熱心に語ってくださいました。お話が英語ということもあり、英語が苦手な私はだいぶ手こずることもありましたが、通訳を用意してくださるという配慮もあり、自分の考えが深まる、とても良い機会となりました。恥ずかしいことに、この日まで私は泥炭湿地林という言葉を知らなかったし、日本にある多くのインドネシア産木材の問題をよくわかっていませんでした。これはただの言い訳にしかすぎませんが、私はただの大学生で、まだまだ知らないことやわからないことがたくさんあります。周りの人が「なるほど、そういうことか」と言っていたり、「ああ、あれね。」のように言ったりすると、正直、自分のちっぽけさに悲しくなります。でも大学生のこの機会に、自分の知識や考えを広げたり、何よりも外国の方と直接お会いして話を聞けた、あるいは話ができただということは、とても良いことであつたと思います。彼らはインドネシアへと帰ってしまいましたが、彼らがここ日本に残してくれたものを大切に、小さな力だけでも、私からも行動していきたいと感じました。トグさん、バスキさん、ニョマンさん、そしてウータンのみなさま、素敵な機会を提供していただき、ありがとうございました。



## 《雨が降る》

「23時45分に、タンジュン・ハラパンに大雨が降りました」と、バスキ(FNPF)からショートメールをもらったのは、明け方の4時18分。

一気に目が覚め、すかさず「おめでとぅ!!」と、びっくりマークを3つつけて返信し、よかったよかった、と、安堵の中、再び眠りについた。始終、敬語で話しかけていた私へ、こんな時間に連絡をくれたぐらいなのだから、よほど誰かに知らせたかったに違いない。

バスキはFNPF(Friends of National Park Foundation)のスタッフで、FNPFはインドネシアの国立公園で保全活動をしているローカルNGOである。タンジュン・プティン国立公園では、在来種植林や環境教育などが本来の活動なのだが、今年の乾季は火災が深刻で、日夜消火活動に明け暮れていた。

そのように彼はずっと森の中で活動を続けているため、久々に所用で訪れたジャカルタでは情報収集に最大限の時間を使いたがっていた。しかし同時に、活動エリアへ火の手が刻々と近づいてきていても、最悪の事態に備えるための消火活動の計画を常に黙々と考えていた。

その後、朝食を終えてから改めて電話をすると、「本当に嬉しいよ!」と、心から喜んでいることが伝わってきて、こちらも清々しい気持ちになった。

雨が降る、ということが、この時期の中央カリマンタンにとってどんなに救いをもたらすものであるか、実際に訪れた後でなければ、決して実感できなかったと思う。

今回、中央カリマンタン州へ初めて訪れることができた。東カリマンタン州のサマリダにいた私は、バスでバンジャルマシンへ向かい、飛行機でパンカランプンへ飛んで、タンジュン・プティン国立公園へとたどり着いた。

その後はサンピット、パランカラヤを通過してジャカルタへ発つという旅程で動いたのだが、道中、常に視界にあったものは、なんとと言ってもアブラヤシの植林、火災の煙、そして火災で焼け焦げた痛々しい土地である。

## 《バンジャルマシンにて》

バンジャルマシンで空港へ行くために乗せてもらったタクシー運転手のおじさんは、私が日本人であることを確認すると、

「以前は日本の企業がたくさんここへ来て木材を買って行ったんだよ」と話し始めた。

突然私の関心と一致する話題を振られたので、やや驚きながら

「へえー、どんな木材を買って行ったの?」と答えると

「ラミンやメランティだよ。1970年代にたくさん買っていった。今はそれらの木もなくなっちゃったから日本の企業もいなくなったねえ。」

同じ日本人であることに複雑な思いを感じながらも、続けて知っている数少ない樹種の名を口にすると話が弾んできた。

「ウリンはここら辺には生えているの?」と訊ねると、

「ウリンならまだたくさんあるよ。伐採が政府に禁止されているからね。」

どうやらこのおじさんは、当時、木材関係の企業で働いていたらしい。その会社は主に香港へ木材製品を

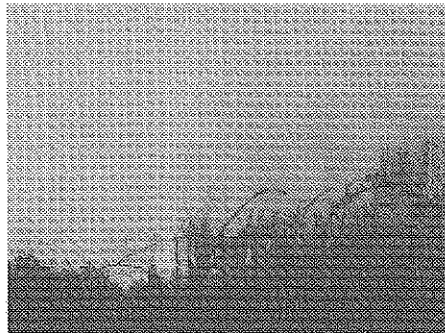
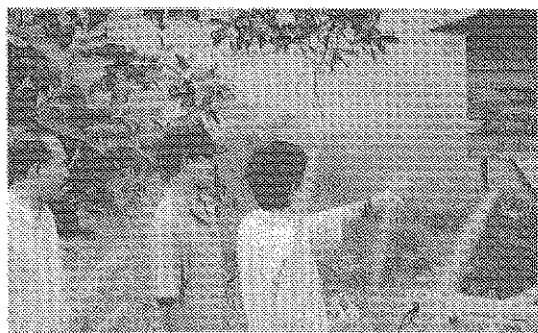
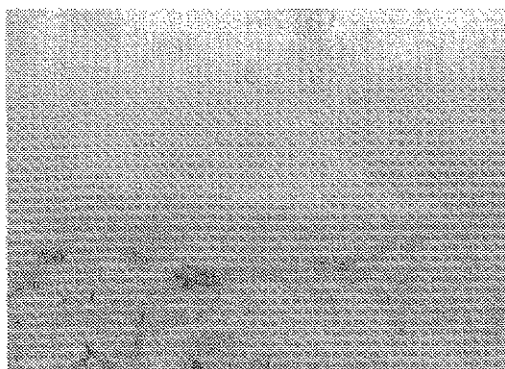
輸出していたと言う。しかし木材産業に足りるほどの森林が消えた現在は、それに代わる産業分野の工場と、  
畑と火災の煙がまちの日常的な風景となった、ということだ。

### 《火災の要因》

火災は雨期が始まれば落ち着くが、乾季の長引いている今年、とくに中央カリマンタンではタンジュン・プティンだけでなく全体的に大変深刻な問題となっていた。

乾季でも雨は降るが、皮肉なことに、雨の後は、農家がいっそう火入れ作業を行なうため、状況がひどくなることもしばしばだと、同じくFNPF スタッフのコマンが後で説明してくれた。

火災の要因は農家の火入れがひとつあるが、この火入れはダヤク民族などの代々行っている管理された焼き畑農法とは様子が異なるようである。というのは、この辺りの農家はダヤク民族だけでなく、すでに移民もかなり入植しており、多くは自分たちで火を管理する方法をよく知らずに火入れをしていたり、あるいは、ひどく乾燥しているために、自然発火と合間って、火が広がり過ぎて手に負えなくなってしまうのだと言う。



(写真/西岡・パラカラヤでの火災で聞き取り[左と右]/泥炭湿地からの火災で燃えた森[上])

### 《恐怖のパラカラヤ》

全く、パラカラヤの光景は恐ろしかった。

泥炭地での火は、地下を縦横無尽に這いながらじわじわと燃えていくため、地上にいる私たちには一体いつどこから火が出てくるか予想もつかない。せつかく大きく育った作物や木も、根から燃えてしまうので手の施しようが無い。

そのような土地の上に人が暮らしているのがパラカラヤ、と言っても間違いではないだろう。

地面のいたる所から煙がもうもうと吹き出し、燃え尽きるまで誰も止められない……、2009年9月30日。

それでも煙の中で、せめて家に火がつかないようにと、井戸からホースをひいて瀬戸際の消火活動をして

いる住民もいた。

曇りなのか本当は晴れているのか、もはや半別れのつけられなくなった空に目をやれば、何重もの煙に覆われて光を失った、ただ赤くて円いだけの太陽が、ぼかんと浮いていた。

途中で立ち寄ったワルンの、気のないご主人にビスケットをご馳走になりながら話を聞くと、

「この辺りはもう4ヶ月、雨が降っていない」のだそうだ。

すぐ隣に広がるご主人の土地は、無惨にもすでに一度燃えてしまったあとである。昨年はずっと雨があって、今年ほどひどくはなかったらしい。

その日、ジャカルタへ飛行機で発つ予定であることを知らせると、

「飛行機も飛ぶかどうか難しいよ。これじゃどこへも行けやしないね」と苦笑いされた。

実際に、午前中飛ぶはずだった便はこのときすでに夜に変更されており、その後空港では2時間近く待たされるはめになった。これで飛ばなかったらどうすればよいのだろう、と翌日の予定を考えると暗い気持ちになった。

結局、中央カリマンタンを離れる最後の瞬間まで、煙に悩まされ続けた。

折しもこの日、スマトラ島のパダンでは大地震が起こっていて、多数の死者を出しているという大変な報道が空港のテレビで流れ、さらに私をぐったりさせたのだった。

## 《今後の火災対策は》

火災対策の一つとして、まちには大小の水路がひかれ、土地を乾燥させないようにしているのだと別の現地 NGO のスタッフが教えてくれた。

確かに、細い水路が入り組み、水が溜まっている場所では火災がなく、功を奏しているように見えたが、大きな水路のほうはすでに枯れてしまっており、いかに乾燥しているかを見せつけるのみであった。また、残念ながら、まちを見渡しても、政府機関らしきものが火災対策に動いている場面には遭遇できなかった。これは、タンジュン・プティン国立公園でも同様であった。FNPF と地元住民のような、現場で消火活動をする他の団体、国立公園の職員や政府機関などは見当たらなかった。

その後、しばらくしてから再びバスキに連絡をとると、雨のおかげですっかり火災は止まったとのことだった。「近いうちに国立公園の職員や現地の他の NGO らと、今回の深刻な火災状況と今後の連携についてミーティングをする」と言う。これを機にすぐにも連携が始まることを期待する。

だいたい、FNPF のメンバーと地元住民たちは、限られた人員と機材で毎日休むことなく目の火と戦い続け、疲れきっていた。それに、決して望んではいないが、火災はおそらく来年の乾季でも再び起こってしまうだろうからである。

今回中央カリマンタンでのあまりにひどい光景を初めて目の当たりにし、すっかり圧倒されてしまったが、森林火災はここだけに限ったことではない。泥炭地ではなくとも、東カリマンタンの森でも起きている。

その村では、1997-98年に起きた大火災の跡が、10年経った今も、森や人びとの生活に残っている。森は一度燃えてしまったら、なかなかすぐにはもとに戻れない。住民は比較的すぐに新しい家を建てることはできるかもしれないが、森にあったさまざまな資源を再び得るには長い月日を待たなければならない。

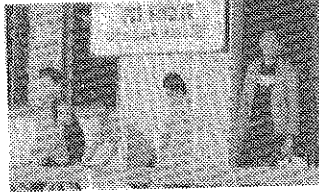
熱帯林での火災も、無管理な伐採や皆伐と同様、森林破壊の重大な担い手だと思った。しかしまた、火災を引き起こすさまざまな要因も、同様に人間の活動によるところが大きいのではないか。だとしたら、ホースで上から水をかけるだけでは、泥炭地の地下でくすぶり続ける見えない火元を完全には消せないように、森林火災の根本的な問題もいつまでも解決され得ないだろうと思うのである。

## インドネシアからの

### 違法材を追う (7)

—2009 年末— 西岡良夫

…違法貿易停止9割と変わるカリマンタン…(最終回)



(違法摘発!インドネシア・ヌヌカン警察)

#### 【西、東カリマンタンで大規模な密輸材摘発、違法伐採停止へ—住民も流すインターネット情報】

政府の内容が変われば国の政策が変わる。

2005年、フォレスト・ウォッチ・インドネシア事務局長のトグ・マヌレン氏が突然、インドネシア林業大臣相談役に抜擢された。私達だけでなく、インドネシアNGOsにとっても驚いた事件だった。(現在2009年10月22日、トグ氏退任)

2007年にトグ氏と再度会った際に、トグ氏は「林業省は違法伐採について取り組んできて、大きな成果を上げた。だが現場では違法伐採が続いている。この問題を撲滅させるために取り組んでいきたい。今後の活動としては違法伐採者を逮捕するだけでなく、裁判を通してこの犯罪性を明らかにしていかなければならないだろう。闘いは長いものになると思うが、我々は必ず実行していかなければならない」と言う。

2007年秋、西カリマンタンでは大手企業Aクスマ・グループの責任者が違法伐採容疑で逮捕された。そして2008年3月、初めての海上での大掛かりな密輸材摘発がされてから、西カリマンタン一帯が静まりかえった。陸路は違法伐採の運搬についてインドネシア側で摘発が2007年から続けられ、マレーシア・サラワク州へほとんど運ばなくなった。

東カリマンタンの最もサバ州に近いヌヌカンでは、対岸の森林から違法伐採していた木材を製材所に運ばず、2007年に工場が閉鎖。サバ州タワウ市の多くの企業が2008年12月に工場操業の停止や一時閉鎖となっていた。密輸をインドネシア海上警察や同国の軍が摘発してきたのだ。

マレーシア政府は依然として動き出さないが、インドネシアの行動で違法材取引が激減してきた。この2009年にはボルネオ島の違法材取引

の9割がなくなった。

以前違法貿易に携わった人が言う。

「木材の違法貿易や密輸が見つかり逮捕なら1人100USドル取られる。中型船なら1500ドル以上の罰金、こんな大金は払えない。危険な状況にある密輸より、陸路でサマリダの多くの工場に運ぶほうが得策だよ。」

2009年、Yayasan Titian のユン氏と東カリマンタン共同調査以降次々と判明してきた。

東カリマンタンのサマリダ北部一角は違法伐採が停止した。クタイ国立公園やその北側の地域ではまだ違法伐採が続く。しかし違法伐採が各地で摘発され(例:9月バンジャルマシン Post)、今年末にはサマリダにある大手企業木材企業も倒産か、廃業となるだろうという事などだ。東カリマンタンでも違法伐採が減った。

中カリマンタンのマウス、セバンガウ国立公園でも違法伐採は停止して、「Victory」との報告だ。今年9月調査ではサンピット地域で続いていた違法伐採も停止。残るはラマンドウ保護林でタンジュン・リンガ社が違法伐採している。西カリマンタンの奥地でも違法伐採がある。

汚職は絶滅していないが、地方も違法伐採、密輸が激減してきた。木材マフィアの一部はアブラヤシ開発企業へと変身した。木材では儲けにならず、このままでは仕事ができない。

インターネットを見比べると2-3年前から違法伐採情報が激減した。違法伐採する情報を人々が YouTube で流し始めた。違法伐採したら、えらい目に会うのが現在だ! 1990年前半スハルト時代と大変な変化。2005年初頭のユドヨノ大統領の「違法材撲滅宣言」からだ。

## 【汚職、木材マフィアの形成、違法伐採—違法貿易の構造】

スハルト時代にボブ・ハッサンという「森林王」と呼ばれた大物がいた。彼はインドネシアの森林の伐採権と利益配分を影で仕切っていた。

1983年にアプキンド (APKINDO・インドネシア合板協会) 会長にボブ・ハッサン (本名: 鄭建盛, Kian Siang) が就任。彼は、国軍やスハルト一族のビジネスと結びつき、スハルトの資金を潤沢に供給し、見返りにインドネシア政府 (特に商工省) からアプキンドへ合板輸出の便宜を図り、木材マネーを作り出す。①ボブ・ハッサンがスハルトへ資金援助、②スハルトがハッサンへ便宜を暗に依頼、③商工省がアプキンドへ独占的な合板輸出許可を供与、④アプキンドが「談合」で合板輸出価格を決定—という仕組みだ。

当時インドネシアの合板は90年台半ばに世界市場の79%のシェアを獲得するようになり、ボブ・ハッサンは莫大な利益を得る。その利益でスハルトへ資金支援という癒着構造が出来た。これが今の違法伐採—違法貿易の仕組みと汚職、賄賂政治を作り出した。

だが経済危機で1998年に丸太輸出税が大幅に引き下げられ、合板工場に優先的に与えられていた伐採権の発給もなくなり、ボブ・ハッサン支配時代はスハルト凋落と共に終わる。その時代が終わったと思ったら、その後、急激に違法伐採の時代がやって来た。今までインドネシアの木材企業は、伐採権を得るために多額の賄賂を払う必要があった。

スハルト独裁体制が終焉し、混乱した政治のため、地方政府が独自の伐採権を認可するようになり、伐採権の許認可を受けない人々が伐採

を実施していた。

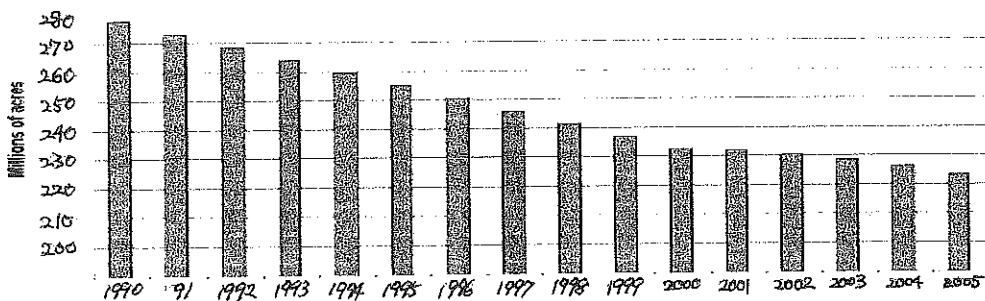
多額の賄賂も納税も必要と感ぜない企業が多くなった。1998-2003年頃は、違法伐採や脱税の摘発で懲役や罰金刑を科せられることは、ほとんどなかった。それでも違法行為の摘発をさけるため、かなりの伐採企業が地方政府役人、軍関係者、警察官等に賄賂を払っていた。賄賂は以前より少額で、より多くの人に分配された。

2000-03年インドネシアの伐採は80%が違法伐採によるものだ。年間3000万~5500万㎡の伐採で、破壊が380万 ha に及ぶ。異常な事態に WALHI、フォレスト・ウォッチ、Telapak 等が違法伐採を2000年頃から告発したのだ。

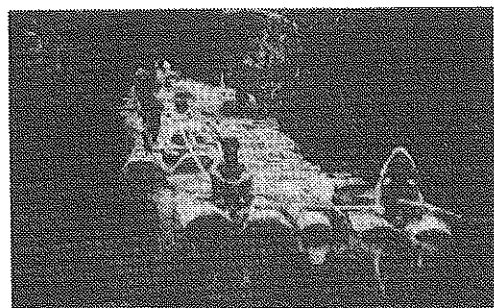
違法伐採された丸太の不正取引による国家被害額は、年間30~41兆ルピア (3,600~4,900億円)。その経済規模の大きさや社会的損失の大きさからも、ユドヨノ現大統領は「3大撲滅運動 (麻薬、賭博、違法伐採)」のひとつに掲げた。しかしその頃実行は進まなかった。

インドネシアにおける違法伐採行為とその後の取引に、ほぼ100%華人が関わっていると言っても過言ではない。2004年11月のコンパス News で、「木材マフィアと呼ばれる企業のボスは、マレーシアや中国に向けて船で丸太や製材を運んでいたところを現行犯逮捕された。しかし「無罪釈放」となった。同紙で、カバン林業大臣は「不正取引を行った張本人から幾ばくかの資金が裁判官にも送金された可能性は高い」と批判。金持ち華人チュコン (福建語、Boss の意) に、目の前に金を積まれ「見逃してくれ」と言われ、裁判官も汚職構造にはまっていた。

Forest Cover 1990-2005, Indonesia







(左・東カリマンタンからマレーシア・サバ州タワウへの違法材／2008年)

(右・西カリマンタン・グヌン・パルン国立公園で違法伐採され、サラワク州へ運ばれる木／2005年)

### 【違法伐採—密輸の代表例ラミン、2009年秋マレーシアへ輸入困難に】

カリマンタンは大きく変わった。それは2005年未からのことだ。

森林破壊は1980年以降も増加し、一時のモトリアムも効果がなく、1998年以降は地方政府が伐採権を乱発して森林破壊が続き、国立公園、保護林の森林も違法伐採が頻繁になる。

そのためインドネシア NGOsは政府へ繰り返し違法伐採停止を要求した。2000年の国際会議での違法材停止を受け、国際的な違法伐採停止へキャンペーンも加速していった。代表例は、泥炭湿地などに生えるラミンの違法取引へ停止の行動だ。

泥炭湿地林から日本、EU、アメリカ、台湾、中国等に輸出された。直接インドネシアから輸出するケース、カリマンタンやスマトラ島からマレーシアのサラワク州、サバ州、半島マレーシア、シンガポールに密輸され、マレーシア産ラミン材として輸出をして取引がされていた。

ラミンはインドネシアの国立公園等で違法伐採された。インドネシア、マレーシアでの1990年頃のラミン生産量は100—120万 $m^3$ であったが、違法伐採や乱開発で激減し、マレーシア、インドネシアの生産量は2000年に10万 $m^3$ もない。正にラミンは貴重樹種となった。ラミン材の利用は日本でも急激に増え、ITTO(国際熱帯木材機関)資料で、日本の輸入は94年に14.5万 $m^3$ 、激減したラミン材を2000年には約7.2万 $m^3$ も輸入し、ある時期には世界一であった。

2003年マレーシア・サラワク州へ19万 $m^3$ の違法材貿易のうちラミンは約30%の推定。だが

サラワク木材産業開発公社(STIDC)は「17%が軽量の硬木類の混合」と申告し、ラミンの申告は皆無であった。ラミンを含む違法材貿易のチェックは、国境付近のマレーシア税関事務所がタビドウにあり、インドネシア、マレーシア税関でチェックが全く無く、密輸は容易く行われた。

2002年からの Telapak、EIA、私たちの国際的な密輸材の暴露と、その後のインドネシア政府の取組み、そして国際社会の動きで違法貿易が激減したのだ。

この11月、ITTO(国際熱帯木材機関)理事会の合間をぬって、トグ氏たちとジャパン・ハウジング・ショーへ行った。そこにMTTC(マレーシア木材認証機関)も出展していた。ラミン販売を聞く。

「MTTC 傘下の製材企業はラミンを扱う企業がなくなった。家具の企業もフレーム企業もラミン材を扱う企業がなくなりました。」私は疑った。

「本当ですか。サラワク州の企業は扱いはしていませんか?」との問いに、

「サラワク州の企業はラミンを扱うか、はっきり判りません」と MTCC のメンバー。

これで決まった。現在2割弱の密輸との報告。今後ラミンが多く残るバツン・ケリフン国立公園付近から違法伐採の運びがほぼなくなり、この1年に密輸材停止が続くなら、サラワク州への違法材貿易もほぼ終わり! サバ州へも僅かの量だ。それが続けばボルネオ島での9割以上の密輸が確実に停止となる。あとは海ルート夜間の確認と、山岳地の違法材貿易の確認である。(終)

【サラワク州の先住民、アブラヤシ開発停止を要求】

8月9日国際先住民日にブナン人ら先住民がアブラヤシ開発一時停止を州政府に申し入れた。現存する法令は森林や生活圏を守れなく、大規模開発が停止しないためだ。9月末、ブナン人は原生林破壊が続くため、「環境平和の森公園」構想を発表。(資料:ブルーノ・マンサ F、マレーシア先住民連合)

【サラワク州、ダム計画反対先住民代表等を逮捕】

バラム川等へダム計画反対を表明している先住民のリーダーや BRIMAS のマーク氏、レイモンド弁護士等15名を9月16日突然逮捕。州政府がダム利権に絡み、批判したため。(ブルーノ・マンサ・ファン)

【インドネシアの違法伐採、激減と UK 政府報道等】

Illegal Logging ニュース等で9月に、インドネシアの違法伐採が1999年の8割ピークに、特に2005年から激減し、2006年に4割に減少と会議で報告。また12月のHuman Right Watch 報告では、2008年に2割強へ激減と分析。(資料:ChathamHouse 等報告)

【東京港区、ビル等の内装材に国産材使用推進】

港区は10月、ビル、集合住宅建設にCO2排出削減貢献の認証制度に国産材推進をH22年9月から適用、条例化も検討。(資料:日刊木材新聞11/6)

【NGOs、マダガスカル政府の違法材の利権批判】

10月3日、WWFとコンサベーション・インターは、マダガスカル政府が同国の資金繰りに困り、広葉樹原木の密輸を特別に許可。同国の森林破壊はすさまじく、林業界の腐敗を促進させると批判(ロイター)

【中国、森林被覆率2割に回復も密輸続く】

11月17日、中国森林局の糟泊邦局長は「同国の森林面積が1億9500haになり、森林の被覆率は2割に回復」と報告。一方でGlobal Forest Watchはロシア、ミャンマー等から違法材の密輸がより盛んになっていると指摘。(資料:フェアウッド News 等)

【ブラジル、2割の森林が再生でCO2大幅削減策】

9月6日、ブラジル国立宇宙研究所(INPE)は宇宙衛星の解像で「アマゾンの森の2割が回復・再生の兆し」と発表。11月15日のガーディアン News は、アマゾンの森林破壊が止まりだし、今年45%破壊を止めると報道。同国政府は、同日「ブラジルは温暖化防止会議 COP15 で38%CO2削減する」と表明。同%削減できれば2005年排出量21億t以下の17億t未満になるという計画を環境相が表明。(11/13日ロイター、ガーディアン、Illegal Logging HP)

【グッチ、熱帯林保護へ】

RAN(Rainforest Action Network)は、グッチ Groupも熱帯材の紙製品の調達方針を変えると11月に報告。同社は包装紙を以前 APP(アジア・パルプアンドペーパー)等の製品を使用と。(フェアウッド News)

【インドネシア NGO、APP社のエコラベル取得批判】

スマトラ島で原生林等破壊するシナルマス・グループのAPP社がインドネシア・エコラベル(LEI)の認証に対し、WWFインドネシア、WALHI等は11月19日、LEIの認証基準を強化すべきと批判。APP社は認証の紙製品を09年末に販売と表明。原生林破壊や人権侵害を引き起こすAPPの体質改善なしにエコラベル認証は許せないと。グリーンピース、RANもAPPやAPRIL社の破壊停止要求をオバマ大統領、ユドヨノ大統領に依頼。(WWF、フェアウッド News 等)

【住友林業、アラス・クスマ Group と植林等業務強化】

住林は、違法伐採でボスが逮捕のアラス・クスマ・グループと連携を強化。10年後に28万haの植林を実施予定。(10・30日刊木材新聞、現地 News 等)

【世界気象機関、森林破壊も温暖化の主要因と】

世界気象機関(WMO)は11月、温暖化の原因とされる大気中のCO2平均濃度が385.2ppmと観測史上最大値を更新で、前年の0.52%増と発表。化石燃料使用と森林破壊が主要因と。(11・23朝日新聞)

# 温暖化 このまま進んだら...

# 森林 CO<sub>2</sub> 発生源?

地球温暖化がこのまま進むと、森林が二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の発生源になる。こんな仮説を、広島大や国立環境研究所がまとめた。21世紀半ばには、土壌で微生物が落ち葉などを分解する際に放出するCO<sub>2</sub>が、樹木が光合成で取り込むCO<sub>2</sub>を上回るといふ。日本の森林生態系の一部を再現して予測した。チームは「さらなる温暖化対策が必要になるかもしれない」と指摘している。

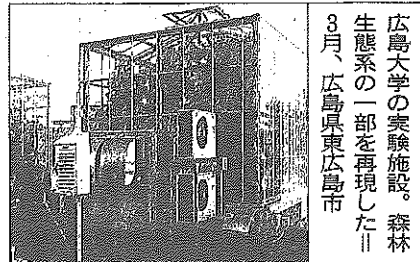
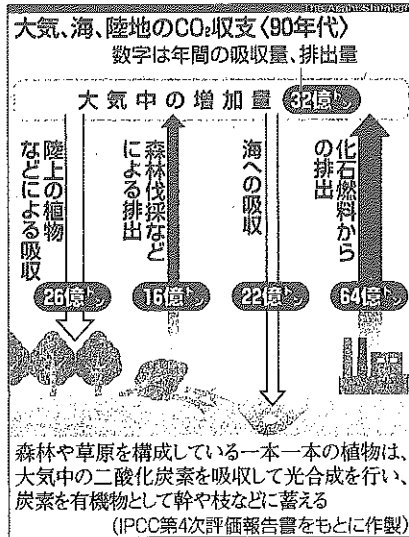
(福家司)

## 微生物放出 吸収超す

予測実験は、国立環境研究所(茨城県つくば市)と広島大など5大学の研究チームが行った。  
広島大の中根周歩教授(森林生態学)らは02年から、広島県東広島市の広島大キャンパス内に大型の温室に似た4層四方、高さ5層の実験施設

### 広大など実験

を計6基設置。施設内にブナ科のアラカシの若木を植えて森林生態系の一部を再現。21世紀半ばの環境を想定して、施設内部の気温やCO<sub>2</sub>濃度を上昇させ、光合成による樹木のCO<sub>2</sub>吸収量から、土壌微生物の呼吸によるCO<sub>2</sub>放出量を引いた「炭素収支」を



広島大学の実験施設。森林生態系の一部を再現した3月、広島県東広島市

計算して予測した。記録が安定してきた07、08年の観測では、温度上昇に応じて、土壌微生物の活動が盛んになり土壌の呼吸速度が速くなった。一方、光合成による植物生産もCO<sub>2</sub>濃度の上昇に連れて増えるが、一定の濃度以上では頭打ちになることが判明。その結果、21世紀半ば以降の環境に近いとされるCO<sub>2</sub>濃度600ppm(現在の1.8倍)、気温(3度高)に設定した場合、1秒当たりのCO<sub>2</sub>の年間収支は、07年が5、以上、08年でも2以上と、大幅なマイナスになった。

一方、環境研と広大などは、全国6カ所の森林で温度を人工的に上昇させ、CO<sub>2</sub>を放出する土壌呼吸の増え方だけを測定する別の実験施設を設置。実験の結果、気温10度上昇による土壌呼吸の増加率は、現在の2.7〜3.6倍になり、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)のモデルの数値より高くなると。北海道から九州まで全国6カ所の森林で実験した土壌呼吸の増え方はほぼ同じ傾向を示したという。

森林のCO<sub>2</sub>の収支バランスは、熱帯雨林や針葉樹林など生態系の特徴や樹齢、緯度などの違いにより、異なることも予想される。海洋研究開発機構による地球規模のシミュレーション(09年)では、2100年ごろまでは微生物のCO<sub>2</sub>排出量は増えるが、森林のCO<sub>2</sub>吸収量も増え続けるとの予測結果が出ている。温暖化で、コケ類が生えなかつた地域でも樹木が育つことなどが原因のようだ。

広島大の中根教授は「今回の実験は限定的なので、地球規模で森林の炭素収支が逆転するかどうかはまだはっきりしない。ただ、温暖化対策では、土壌から出るCO<sub>2</sub>の増加を考慮する必要がある」と主張している。環境研地球環境研究センターの梁乃申・主任研究員も「温暖化で土壌から出るCO<sub>2</sub>が増加し、さらに温暖化につながる悪循環に陥る恐れもある」と負のスパイラルを懸念している。

# HUTAN ACTION SCHEDULE

- New Year -

## 2010年 ウータン総会

① 1月31日 <sup>SUN</sup> ② 日 1:00p.m~4:30p.m.

③ 会場 大阪市立 弁天町市民学習センター(和室)

[Tel] 06-6577-1430

・JR, 地下鉄中央線 弁天町下車すぐ

[問い合わせ] 0722-52-0505 西岡まゆ(夜間)

### INFORMATION

《会費、カンパを頂いた方々》(2009年9月28日~12月15日)

(敬称略)

石中英司 伊東真吾 井上真 井下祥子 H.I. 後藤裕己 下山久美子 助友伸子 田岡めぐみ  
恒成和子 寺川庄蔵 中島紘 永田良昭 野呂雅之 服部隆志 宮澤朔子

(ありがとうございました)



### ウータン・森と生活を考える会

[OFFICE] 〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

(HP)

[www.005.upp.sq-net.ne.jp/hutan/](http://www.005.upp.sq-net.ne.jp/hutan/) Tel.06-6372-1561

【一部】300円 【年会費】4000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。